花鳥浮文

重要文化財
襖絵

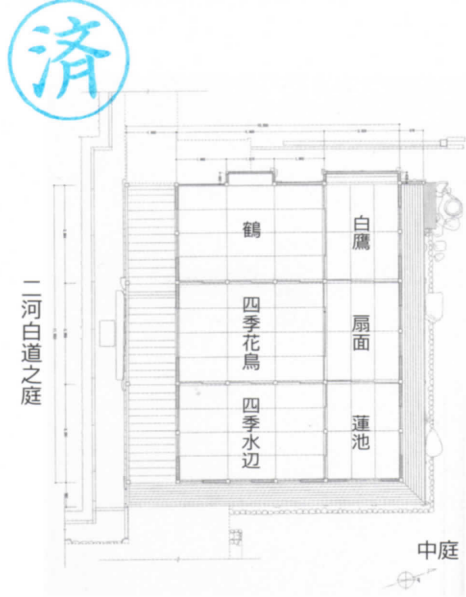
當麻寺奥院　大方丈
上村淳之画

国指定 重要文化財『大方丈』

當麻寺奥院を構成する主要な建造物で、方丈とは住職の居所という意味。棟札から慶長 17 年 (1612) の建立と分かる。

寄棟造・瓦葺の木造建築で桁行六間、梁間五間半の規模を誇る。南正面には一間幅の広縁を配し、東と北には落縁を廻らす。内部には 12 畳間 × 3、6 畳間 × 3 の計 6 間があり、各々が襖で仕切られている。西側を上之間とし床の間が設けられている。上之間 12 畳（鶴之間）には江戸時代狩野派の絵師によって唐の玄宗皇帝と楊貴妃の物語を描き、上之間 6 畳（白鷹之間）には水墨画が描かれている。

昔、中の間 6 畳（扇面之間）は仏間として本尊が祀られていた痕跡が残り、格天井で他の間とは格式を分けている。ここに牡丹の絵天井が描かれていることから、奥院第 57 世観誉上人が仏に供える花として牡丹を植樹したことから生育が盛んとなり、現在「牡丹の當麻寺」と呼ばれるほどとなった。



『花鳥浄土 Ka – Cho – Jo – Do』

平成 30 年秋、日本画家で国の文化功労者である上村淳之画伯によって奉納された。

6 間をそれぞれ「鶴」「四季花鳥」「四季水辺」「白鷹」「扇面」「蓮池」と題し、30 枚の襖に 60 面の絵から構成され、日本の美しい自然が多様な鳥の姿と共に表現される。そして本作品は日本画を日本の伝統「染色技法」によって描くという画期的なプロジェクトでもある。絵具で描くのではなく、日本画の繊細な色彩を、卓越した蝋纈染の技術で表現している。

上村淳之
Uemura Atsushi

Taimadera Okunoin
當麻寺奥院

方丈庭園『二河白道之庭』

大方丈の南側には二河白道之庭がある。

「二河白道」とは唐の善導大師が念仏信仰を譬えた説話で、水河（白砂）は貪り、火河（金剛砂）は怒りを象徴し、人間が生まれながらに持つ二大煩悩の恐ろしさを表している。中央の石道は念仏を信じ行ずる心を白道として、迷いの娑婆世界（東側）と悟りの極楽浄土（西側）を表現している。

昭和の名庭師 中根 金作 師によって作庭された。

當麻寺 奥院
-Taimadera Okunoin-